

氏名	國友 <sup>くにとも</sup> 淑弘 <sup>もしひろ</sup>
学位の種類	博士(神学)
報告番号	甲第487号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	アフリカ系アメリカ人による「スピリチュアルズ(黒人霊歌)」の即興性について — <i>Slave Songs of the United States</i> (1867)を基に
審査委員	(主査) 大島 博(立教大学大学院キリスト教学研究科 特任教授) 星野 宏美(立教大学大学院キリスト教学研究科 教授) ウェルズ 恵子(立命館大学大学院文学研究科 教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

#### 序章

1. 概要
2. 先行研究及びその課題
3. 資料について
4. 方法

#### 第1章 資料とする *Slave Songs of the United States* について

1. 出版に至る経緯
2. 編集者並びに採譜者及び楽譜提供者について
3. 構成、内容について

#### 第2章 *Slave Songs of the United States* のリズムについて

1. リズム構造における先行研究
2. リズム記譜における採譜及び編集者の知覚と腐心
3. *Slave Songs of the United States* のリズム構造について
4. まとめ

#### 第3章 *Slave Songs of the United States* の旋律及び和声について

1. 旋律及び和声における先行研究
2. 編集者による記譜の傾向
3. スケールについて
4. ブルー・ノートについて
5. ヘテロフォニー唱法について
6. 変化して行く歌唱法
7. まとめ

#### 第4章 *Slave Songs of the United States* の呼応と反復について

1. 呼応と反復に関する先行研究
2. *Slave Songs of the United States* の呼応について
3. *Slave Songs of the United States* の反復する歌詞句について
4. まとめ

#### 終章 (結び)

巻末資料1 *Slave Songs of the United States* 関係者の相関図

巻末資料2 *Slave Songs of the United States* の収録曲名、拍子、弱起・強起、採譜者、採譜場所一覧表

巻末資料3 *Slave Songs of the United States* 収録曲の調及びスケール（音階）並びに、旋律及び和声に関する特徴的箇所の一覧表

巻末資料4 *Slave Songs of the United States* 収録曲の反復句及び節の分類一覧表

文献表

## (2) 論文の内容要旨

18世紀中頃から19世紀末にかけて起こった信仰復興運動の一環である野外集會を淵源とし、アメリカ南部の農村において、アフリカ系アメリカ人の間で口承により発展した「スピリチュアルズ（黒人霊歌）」は、アメリカにおける民俗歌の最も重要なジャンルの一つである。「スピリチュアルズ」に関しては、既に社会学的、文学的な面からの研究はなされているが、その音楽的特徴とその発展に焦点を当てた研究はごく僅かに留まる。

本論文は、「スピリチュアルズ」が最初に楽譜化された曲集、*Slave Songs of the United States*（以下 S.S.U.S.）を研究の対象とし、その分析を通して初期「スピリチュアルズ」の音楽的特徴を明らかにする試みである。

論文の主要な課題は、論文題目にもある通り、その証明に困難を伴うため、従来研究対象と成り難かった「即興性」の問題に取り組み、その現象する形態と音楽的な意味を探求することにある。

論文の構成は、まず第1章で S.S.U.S.の内容について、曲集の章立てに従って検討し、出版に至る経緯、編集方針に触れた後、記譜法も含めた楽譜の特徴について概観し、更に収集地域別の特徴にも言及することで第2章以降における考察の前提を確認する。

楽譜分析の具体的な方法としては、「スピリチュアルズ」に脈々と流れるアフリカ民族音楽を対象とした分析方法を援用して、第2章で「リズム」、第3章で「旋律及び和声」、第4章では「呼応と反復」について、それぞれ先行研究の成果を踏まえて検討を重ねて行く。その際、記譜に見られる微妙な差異から、実際の音の様子を読み解いてゆく。

そこから導かれる「スピリチュアルズ」の特徴は、一つには、リズムの柔軟な変化、旋律や和声における微妙なずれであり、それは、例えばアフリカ音楽にも通じる固有の音階や、ジャズにも用いられるブルー・ノート、そして複数の歌唱者が同時に歌う際に生じるヘテロフォニーとして現れる。二つ目は、ひとりの先唱者に対する応唱とその自由な展開である。そして、この「呼応と反復」の成否が、歌い出される歌詞の内容への共感の度合いに左右される事も示される。

そして終章では、前章までの考察で得られた S.S.U.S.の音楽的特徴が、いずれも「即興性」を土台としており、この「即興性」がそれぞれの要素を結びつけ、相互に作用していることを結論として導き出している。

最後に、アメリカ合衆国南部の、いわゆるバイブルベルトと呼ばれる地域において、即興性を帯びた「スピリチュアルズ」が信仰復興運動にどのように関わり、影響を与えたのかに言及し、更に今後の研究の課題についても触れて、本論文の結びとしている。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、アメリカ合衆国において、民族歌の代表的なジャンルを形成する、申請者の表現によれば「アフリカ系アメリカ人による『スピリチュアルズ (黒人霊歌)』」における演奏の本質たる「即興性」について、主に「リズム」「旋律と和声」「呼応と反復」の面から分析を行ったものである。

分析の対象として選ばれているのは、アメリカ南部で口承によって伝えられ、アメリカ黒人の間で歌われていたスピリチュアルズが、19世紀中葉、白人収集家によって初めて楽譜に書き留められた曲集、*Slave Songs of the United States* (1867) (以下 S.S.U.S.と略記) である。

本論文は、まずこの資料の歴史的背景、出版の経緯、編者の立場、テキストと楽譜について詳細な検討を施している。先述のように、これらの歌は口頭により伝承され、発展してきたという経緯があり、その底流にはアフリカ民族音楽にまで遡る「即興性」の伝統が流れている。そのため、演奏の形を固定化する試みである楽譜化には本来馴染まない。しかし筆者はアフリカ民族音楽研究の手法を借りながら、その楽譜を検証し、即興性の痕跡を読み取るべく検討を重ねてゆく。

例えば、選択された拍子の分析から、労働のリズムという身体性に歌のテンポが強く影響されていることなどを指摘する。また、旋律や和声においても、西洋近代の音楽理論では説明することの困難な、和声のゆらぎ、歌唱旋律の多重化 (一種のヘテロフォニー) といったアフリカ起源の音楽的特徴を S.S.U.S.に見られる一見不統一な記譜から読み解いてゆく。更に、「呼応と反復」というスピリチュアルズの演奏形態について、テキストの形式分析を通して説明している。

そして、これらの要素が、その根底において「即興性」によって緩やかなつながりを持ち、互いに影響を及ぼしながら、文字通り一回性の音楽として立ち現われることを結論として導き出している。申請者は、自身ゴスペル歌手及びその指導者として豊富な経験を有している。その経験に裏づけられた研究は、理論的な探求に留まらず、生きた音楽としての対象に迫ろうとする点においても独自性を感じさせる。

### (2) 論文の評価

「スピリチュアルズ」に関する研究においては、音楽的な特徴について正面から取り上げた例は少なく、その空白を埋めるものとして貴重な研究である。研究対象である S.S.U.S.についての解説は非常に詳細であり、引用文献の年代がやや古いくらいはあるものの、アフリカ民俗音楽の研究史を俯瞰している点も評価できる。「リズム」「旋律と和声」「呼応と反復」という音楽要素と「即興性」との関係の論証にはやや曖昧な点が見られ、音楽分析の方法論についても検討の余地が残されている印象も無くはないが、当該分野の研究は、少なくとも日本では極めて少なく、大変意義のある論文であると評価できる。